
幻想郷見聞録

五円玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷見聞録

【Nコード】

N60250

【作者名】

五円玉

【あらすじ】

幻想郷に迷い込んだ主人公ゲンは幻想郷の人たちと会いさまざまなことを学んでいく。

(見聞録ばかりですいませんm(_ _)m)

プロローグ／第壹章

プロローグ

ここは、どこだ？ 辺りは薄暗く、不気味な霧がやや薄くかかっている。しかしそのことを除けば、とても見慣れた場所だ。しかしおかしい。自分はいさつきまでここにはいなかった筈だ。さつきまでは・・・、どこにいたんだっけ？

第壹章 博麗神社

気がつくと朝になっていた。いつの間にか寝てしまったらしい。

とりあえずあたりが明るくなったため、自分の手荷物を確認した。財布、服、下着、ライト、

そして、テント？ キャンプにでも行く途中だったのだろうか？

そして辺りを見回すと神社があり、その奥に人影が見えた。とりあえず話を聞こうとしたが、せっかく神社があるので、お参りすることにした。お賽銭を賽銭箱にいれ、手を二つ叩く。そのとき、先ほどの人影の人物が視界に映った。口をこれでもかというくらい大きく開けてこちらを見つめている。とりあえずここがどこか聞かなくてはならないため、

「あのお、ここどこ？」と尋ねた。

その人物はやつと口を閉じ、こういった。

「幻想郷だけど？ つかあんた人間？」

「あたりまえだ。これをみてどこが人間じゃないってんだよ」

「じゃあまず自己紹介してもらいましょうか」

「尋ねるときは自分から名乗るのが普通だろ？」

「つたく、めんどくさいわね。あたしは博麗霊夢。この博麗神社の巫女よ。さ、名乗ったんだから今度はあんたが名乗りなさい」

「俺は、ん？俺の名前は、ん、ごめん忘れ・・・」

「ぼかつ！思いつき　彼女にとっては普通だろうが　殴られた。

「それくらいで殴るなよ」

「自己紹介もまともにできないんだからしょうがないでしょうが！
つたく、これでも手加減した　ほうなのよ？あんたがお賽銭入
れてくれたから」

「でもぜんぜん痛えよぉ」

「要するに覚えてないのね？なら仮の名前がいるわね。なにがいい
？」

「ここ幻想郷だよな？ならゲンでいいや」

「なによ、いいやつて。まああたしはどうでもいいけどね。」

こうしてゲンの幻想郷生活は幕を開けたのである。

第貳章

第貳章

幻想郷の魔法使い 霧雨 魔理沙

ゲンが幻想郷にやってきてちょうど一ヶ月が過ぎた。ゲンは巫女の仕事を手伝う（巫女の仕事とは名ばかりでほとんど雑用）のを条件で神社に泊めてもらっている。テントがあるのに。

ある日ゲンがやっと目が覚めたとき、霊夢が昨夜行っていたことを思い出した。

「やべ！寝坊した！」

昨夜

「ゲン、明日はちょっと用があつて魔理沙の家に行くから早く起きなさいよ？寝坊したらおいていくからね。地図おいとくけど」

「わかったああああ」

バタムツ！ゲンは布団に倒れこみいびきをかいて爆睡をはじめた。

「えーっと地図によるとこの先に・・・あつた！ってこれ？霊夢のいつてた魔理沙の家って？」

目の前にあるのは、オンボロの家だ。

「何がオンボロだつてえー！？」

「うわあ！」

一瞬の光がほとばしったかと思うとさっきまでゲンがいたところは小さなクレーターができていた。

「私の家見てオンボロとか二度というなよ！つたくよ」

私っていったのに口調は完璧少年だ。つか危険だ。こいつ。

「まったく騒々しいわね。ん？あ、ゲン今ついたの。おそかったわね。この子が霧雨魔理沙。魔法使いよ」

ハイ？ま、魔法使いですか？

「私の家をオンボロって抜かすもんだからお仕置きしてやったぜ！」

「自慢げにいうか？そこ」

「おい、ゲンとかいったな？新参。またマスタースパークの餌食になりたいのか？」

「ひ、卑怯だあゝ！俺が何もできないことをいいことにいい！」

「何だお前、スペルカード使えないのか？」

「なにそれ？聞いたことねえけど？」

「今みたいなのはスペルカードっていうものから出される技だ。ほとんどのやつは持つてるぞ。なあ霊夢？」

「この子現世から迷い込んだらしくて、スペルカードも何もないのよ」

「あ、財布の中にこれ入ってた」

「「あ！スペルカード！」」

「ん」と『龍符 焰龍刻印』？

キユオオオオオオオン！この森全体を覆うような赤い龍が一匹、ゲンの右腕から飛び出してきて一吠えするとゲンの右腕に刻印となってもどった。

「なんだったんだ？今の」

冷たい風がゲンたちを押し流すようにピューッとふいて、消えた。

第参章

第参章

幻想郷の異変

幻想郷の人たちにもすっかりなじんできたゲンにはある能力のようなものが少しずつ芽生え始めていた。その能力は、幻想郷の異変を感じることができる能力。なにか感じるたびに霊夢と魔理沙に伝え、小さなうちから異変を消す仕事にゲンも霊夢、魔理沙もすっかり浸ってしまった。

ある日、ゲンは寢床で激しい頭痛にうなされていた。そして頭に響く声が一つ、

「たすけて・・・」

ガバツ！ゲンは激しい汗と体に滴らせ、ハアハアと息荒く呼吸をし、「なんだったんだ？いまの」

とつぶやいた。この声の主が後に幻想郷そのものだということはゲンは知る余地もない。

次の日、ゲンは昨夜のことを霊夢、そして魔理沙に伝えた。

「『たすけて』ねえ……。なにをかしら？」

「ゲンに聞こえたってことは、異変と何か関係あるんじゃないのか？」

相談中の魔理沙と霊夢にゲンが割って入った。

「次から俺もついていっていいか？」

「ちよつと待ちなさいよ！あんたスペルカードもまともに使えないんでしょう？ついてきたって足手まといよ！」

「いや、一緒に戦うとかじゃなくて・・・、実際あの「声」を聞いたのは俺だ。だから、ついていったほうがいいかなって・・・」

「あんた、なにをいつ・・・！」

なにか喋ろうとした霊夢をさえぎって喋ったのは魔理沙だ。

「まあ、ゲンのいうことも一理あるんじゃないのか？ いいよな、霊夢？」

「もう……。いいわよ。ただし護衛は魔理沙ね」
「なっ！」

火花を散らす魔理沙と霊夢をスルーしゲンは

「レミリアたちにも一応相談してみようぜ。紅魔館に行くか」
と二人を促し、ゲン一行は木の生い茂る森へと足を踏み入れた。

第参章（後書き）

なんかもう龍のスペルカードとかどうでもよくなってますね（ハア

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6025o/>

幻想郷見聞録

2010年10月31日03時29分発行